

論文審査の結果の要旨

| | | | |
|--|----------------|------|------|
| 報告番号 | 博(医歯薬)甲第 793 号 | 氏名 | 中田智夫 |
| 学位審査委員 | 主 査 | 柳原克紀 | |
| | 副 査 | 江石清行 | |
| | 副 査 | 川上 純 | |
| 論文審査の結果の要旨 | | | |
| <p>1 研究目的の評価</p> <p>橈骨動脈アプローチの冠動脈造影は大腿動脈アプローチと比較して、出血などの合併症が少ないことなどから、心臓カテーテル検査や治療の際に広く行われている。しかし、シースの挿入の直接的刺激により橈骨動脈の機能障害をきたす危険性がある。</p> <p>本研究では、簡便で再現性の高い血管内皮機能検査法である Reactive hyperemia peripheral arterial tonometry (RH-PAT) を用いて、血管内皮機能障害を評価しており、目的は妥当である。</p> | | | |
| <p>2 研究手法に関する評価</p> <p>2010 年 5 月から 2011 年 10 月に長崎大学病院で橈骨動脈から冠動脈造影を施行した 43 症例を対象とした。シース挿入側と対側(コントロール)の RH-PAT を測定した。また、シースサイズ (6-Fr または 4-Fr/5-Fr) による違いも併せて評価した。この研究手法は妥当である。</p> | | | |
| <p>3 解析・考察の評価</p> <p>橈骨動脈への 6-Fr シースの挿入は血管機能を障害し、6 か月後も完全には回復しなかった。更にこの血管機能障害は手技時間が長い方が顕著であった。以上から、橈骨動脈アプローチの際には、血管機能障害を軽減するため、より小さなシースサイズ、より短い手技時間で検査する必要があると思われた。</p> <p>以上のように本論文は循環器疾患の研究に貢献するところが大きく、審査委員は全員一致で博士(医学)の学位に値するものと判断した。</p> | | | |